



水たばこを吸う、ぶっさらぼうなイモムシが、アリスの不安を増大させる。アリスは不思議の国のありさまに困惑し、「あんたはだれだい?」というイモムシの質問にも答えることができない。

な生き物が奇妙なふるまいをし、変な出来事がつぎつぎ起こり、ことばの法則も通常とは異なっている。それこそがこの物語の特徴であり、主題でもある。

アリス自身はこの異様な法則を受け入れている。ウサギの穴を落下しながら、アリスは「地球の"たんはい"側の点」にたどり着いてしまうのではと思いはじめ、ここはオーストラリアかニュージーランドですか、と尋ねる自分を想像する。そ



ハリー・ポッターにとって、死の影はつねに身近なものだ。ハリーは闇の陣営と戦うヒーローであり、その過程で生きるのに必要なことを学んでいく。

れにつづくアリスの考えは、キャロルが子供の無邪気さに精通していることを鮮やかに示している——「だめよ、そんなこと聞いちゃいけない。どっかに書いてあるのが見つかるかもしれないんだから」。

アリスはつねに考えつづける。自分はいったいだれなのか、この不思議な世界にはどんな法則があるのか、そしてどうすれば自分がまともな状態にもどれるのか、と。最初にアリスがとまどうのは、体が大きすぎたり小さすぎたり、したいことをするのに体の大きさが合わないことだった。イモムシに会ったあと、また別の不安が生じる。つっけんどんな調子で繰り返し否定されるとい難題と直面することになったのだ。物語が終盤へ向かうにつれ、女王が首を刎ねろという命令を乱発するなど、暴力の気配が物語に緊迫感をもたらしていく。

規範からの逃避

アリスが作中で出会うのは多くが動物だ。冒険の前後に登場する姉とアリス自身を除けば、作中に登場する人間は、ハー

ハリー・ポッター現象

J・K・ローリングによる、魔法使いの少年の冒険を描いた〈ハリー・ポッター〉シリーズ(1997年～2007年)は、子供の物語の力を証明した作品である。シリーズが社会現象となるほど大ヒットしたのは、成長物語や学園小説など複数のジャンルとファンタジーを巧みに融合し、さらに冒険小説やロマンスなどの要素を織り交ぜたことがひとつの要因である。ローリングは「死」がこの物語の重要なテーマであると公言していたが、そうした発言が作品全体に通じるおもしろおかしい雰囲気をもたらし

“
へえ！ ニヤニヤ笑いなしの猫なら
よく見かけるけど、
猫なしのニヤニヤ笑いなんて！
生まれてからいままで、こんな
変てこなもの、見たことがない！
『不思議の国のアリス』

トの王と女王をトランプの札とすると、帽子屋と公爵夫人だけだ。

日常生活とは正反対の世界観は、旧習に従うことに慣れたヴィクトリア朝の大人にとっても解放的に見えたにちがいない。ナンセンスが人々を惹きつけるのは、ひとつには想像をふくらませる素地になるからであり、またおそらく、社会規範からしばし解放されたいという無意識の欲求を満たすからでもある。

アリスは物語が進むにつれて一段と率直になり、終盤の裁判の場面では、女王

はなかった。このシリーズの出版計画は、実際の時間軸でハリーが年齢を重ねる設定となっていたので、出版当初の幼い読者たちは文字どおりハリーとともに成長することになり、特に深い読書体験を得ることになった。

子供に絶大な人気を誇るだけでなく、多くの大人の読者も惹きつけたこのシリーズは、著者に大きな富をもたらすことになった。2013年までの全7巻の総販売部数は4億5千万部を超えている。

のゆがんだ正義について「ばかばかしい！ナンセンスよ！」と、当人に対して言うのける。そして、ふつうの子供の大きさにもどったアリスが最後にしたのは、トランプはただのトランプの札ではない——つまり、無生物である——と言いきることだった。そのことばが発せられると、トランプは宙へ舞いあがる。持ち前の性格を発揮し、アリスは幻想の世界を破裂させたのだった。

最終章は、アリスの姉を前面に出すことで、みごとに決着がつけられている。はじめは姉がアリスを愛おしげに見つめているだけだが、やがてアリスから聞いたばかりの奇妙な生き物たちが目の前を通り過ぎていく。そして最後に、姉の見たアリスは「大人の女性」になっていて、それでも子供のころからの「無邪気で愛に満ちた心」を忘れることなく、不思議の国の物語をつぎの世代へ語りついでいるのだった。

ナンセンスが意味するもの

この作品ほど感受性が豊かで、機知に富み、生き生きとしたファンタジーとなると、隠された意味についての数々の疑問も呼び起こす。たとえば、作中ではよく食べ物に不安をもたらすが、キャロル自身が摂食障害に苦しんでいたのではないかと考えられる。キャロルがオックスフォードで教えていた数学は古典的な分野であり、当時は抽象的な数学論が登場しはじめていたので、作中に奇妙な論理が出てくるのは新しい数学に対するあてつけや批判だという可能性もある。

たとえそのように個人的な含意があったとしても、アリスの冒険の普遍性が損なわれることはない。それは、この作品の基調にある子供の傷つきやすさという

テーマは、キャロルの時代だけでなく現代にも通じるものだからである。

キャロルは1871年に、アリスが登場するよく似た第2の物語を発表する。『鏡の国のアリス』だ。この物語にも、印象的なキャラクター(セイウチや大工、トウィードルダムとトウィードルディなど)が登場し、ナンセンスな詩や、あべこべな論理を楽しむ軽妙な格言が盛り込まれている。

ファンタジーの誘惑

この作品の影響は、J・R・R・トールキンの『ホビットの冒険』やC・S・ルイスの〈ナルニア国物語〉シリーズでの不思議の国の変貌や、ドクター・スースの気まぐれな韻文の世界、ロアルド・ダールの『チョコレート工場の秘密』、そしてJ・K・ローリングが描く魔法使いの学校ホグワーツにまで見られる。21世紀にはリアリズムの新たな動きが児童文学の分野でも見られるが、いままファンタジー小説は幼い心を強く揺さぶっている。■



ハンプティ・ダンプティとの会話には、ほかのキャラクターとの会話と同じく、さもまともだと言わんばかりに、なぜなぜやことば遊び、そしてたらしめな論理が入り混じる。



ルイス・キャロル

1832年、イギリスのチェシャーに生まれたチャールズ・ドジソン(ペンネームであるルイス・キャロルのほうがよく知られる)は、牧師の息子だった。オックスフォード大学のクライスト・チャーチ・カレッジの数学学部を首席で卒業し、1855年から生涯にわたって同校で教鞭をとりつづけた。聖職にも叙任されている。作品が最初に出版されたのは1856年で、孤独に関する詩集だった。ドジソンは知己に恵まれ、友人のなかには評論家で作家のジョン・ラスキンや、画家で詩人のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティがいた。キャロルはまた著名な写真家でもあり、詩人アルフレッド・テニスンや舞台女優エレン・テリー、そして多くの子供たちの写真を撮影した。1898年に、重いインフルエンザの果てに気管支炎にかかり、65歳で死去した。そのときすでに『不思議の国のアリス』はイギリスで最も人気のある児童文学となっていて、ヴィクトリア女王もファンのひとつだった。

ほかの主要作品

1871年 『鏡の国のアリス』

1876年 『スナーク狩り』